

日泌尿会誌 第99巻 第2号 平成20年2月15日印刷 平成20年2月20日発行(奇数月1回20日発行) 昭和30年4月8日第3種郵便物認可

# 日本泌尿器科学会雑誌

FEBRUARY 2008 **VOL. 99** **NO. 2**

総会特集号



日泌尿会誌  
Jpn. J. Urol.  
ISSN 0021-5287

社団法人 日本泌尿器科学会



## PP-573

当院におけるリソトリプターSを用いたESWL520例の治療成績の検討

愛知厚生連海南病院

小林 大地, 田口 和己, ハイ 漢成, 窪田 裕樹, 山田 泰之

【目的】当院におけるドルニエ社リソトリプターSによる治療効果、及び施行者の経験・技術により破碎効果に差が出るかどうかを検討した。【方法】2004年12月から2007年7月までに上部尿路結石に対してESWLを施行した520例(単一専門医320例、他医師200例)を対象とした。治療翌日、2週間後のKUBにて治療効果の判定を行った。平均治療回数、年齢、性別、最大結石の直径、治療部位、照準方法、衝撃波回数、破碎効果について比較検討した。【成績】総治療回数は607回(単一専門医370回、他医師237回)、平均治療回数は1.17回(1.16回、1.19回)であった。平均年齢は54歳(52.61歳、56.4歳)、男性396例(236例、160例)、女性124例(84例、40例)、最大結石の平均直径は10.77mm(10.83mm、10.63mm)、治療部位は腎が196例(118例、78例)、尿管が321例(201例、78例)、照準方法はX-ray 148例(72例、76例)、X-ray+US 357例(234例、123例)であった。平均衝撃波回数は3324回(3270回、3410回)、82.0%であった。【結論】平均治療回数が1.17回と他院に比して、良好な結果を修めているのはUSを頻用しているためだと考える。今回の検討で520例中320例は単一の専門医により行われ、200例は3-4年目の医師により行われたが、技術介入による有効率に有意な差は認めなかった。

## PP-574

ドルニエリソトリプターDを用いた上部尿路結石の治療成績

立川相互病院泌尿器科<sup>1)</sup>、都立府中病院泌尿器科<sup>2)</sup>、群馬大学泌尿器科<sup>3)</sup>、東葛病院泌尿器科<sup>4)</sup>、日本医科大学泌尿器科<sup>5)</sup>

李 哲洙<sup>1)</sup>、宮久保 真意<sup>1)</sup>、栗田 晋<sup>1)</sup>、一ノ瀬 義雄<sup>1)</sup>、小沢 雅史<sup>4)</sup>、長瀬 泰<sup>2)</sup>、押 正也<sup>2)</sup>、井上 正晴<sup>3)</sup>、奥木 宏延<sup>3)</sup>、神保 博之<sup>3)</sup>、柴田 康博<sup>3)</sup>、伊藤 一人<sup>3)</sup>、西村 泰司<sup>5)</sup>

【目的】当院にてドルニエ社製リソトリプターDを用い施行した、ESWLについて治療成績を報告する。(対象)1998年11月から2007年8月まで1143回のESWLを施行した。そのうち上部尿路結石に対しておこなった1065回について検討した。膀胱結石に対しては7例施行していた。(結果)今回対象となった症例は557例であった。平均年齢は51歳となった。結石径による有効率は1cm以下では97%、2cm以下では93%であった。尿管結石に対しては有効率96%で、完全排石率95%であった。合併症としては被膜下血腫は4例に認められたが、2004年を最後に発生していなかった。また同様に2004年頃より破碎回数の増加がみられた。術直後に肉眼的血尿はほとんどの症例にて認められた。(考察)外来にてESWLを行い、比較的良好な成績を出すことが出来た。外来で行うため、破碎強度の調整、回数に対する再観察を行い、合併症をへらしつつ良好に治療できるようになったと考えている。

## PP-575

3種類の超音波機器による膀胱容量測定値の比較

旭川医科大学医学部泌尿器科

沼田 篤, 高木 大輔, 北 雅史, 川上 憲裕, 倉 達彦, 佐賀 祐司, 柿崎 秀宏

【目的】断層エコー(US)、ゆりりん、BladderScanTM 5000(BS)の3機種を用いて膀胱容量を測定し、排尿量の実測値と比較検討した。【対象・方法】41歳、残尿を認めない男性において、さまざまな尿意時にゆりりんにて膀胱容量を測定後、USにて膀胱の最大の横断面と矢状面を描出し、その後にBSを5回測定してから排尿して尿量を測定した。USでは横径(cm)×前後径(cm)×上下径(cm)×0.5(ml)で膀胱容量を求め、BSは中央の3つの測定値より求めた平均値を測定値とした。【結果】膀胱容量は17回測定した。膀胱容量測定値(x)と実測値(y)との相関係数(r)と回帰直線は、US:r=0.972、y=1.335x-0.4、ゆりりん:r=0.968、y=0.784x+14.194、BS:r=0.972、y=0.752x+54.656であり、いずれの測定器を用いた測定値も実測値と強い相関を認めた。各膀胱容量におけるBSの測定値の最大値と最小値の差は14~173(平均67)とばらつきを認めた。【考察】ゆりりんでは実測値より過大に、USでは過小に測定される傾向があることを念頭に置いて測定値を評価する必要があると考えられた。また、BSでは複数回測定し平均値を求めることが望ましいと考えられた。

## PP-576

泌尿器癌骨転移に対して経皮的椎体形成術を施行した2症例

岩手医科大学医学部泌尿器科<sup>1)</sup>、岩手医科大学医学部放射線科<sup>2)</sup>

瀬尾 崇<sup>1)</sup>、近田 龍一郎<sup>1)</sup>、赤坂 俊太郎<sup>1)</sup>、品川 剛廣<sup>1)</sup>、小原 航<sup>1)</sup>、江原 茂<sup>2)</sup>、藤岡 知昭<sup>1)</sup>

泌尿器癌骨転移に対して経皮的椎体形成術を施行した2症例を経験したので報告する。【症例1】36歳、男性。両下肢のしびれを主訴に受診した。3年前に右精巣腫瘍(胎児性癌、T2N0M0)で高位精巣摘除術が施行されている。HCGβ4.0ng/ml、画像診断で左腸骨前面の腫瘍性病変、第3・11胸椎への骨転移を認めた。化学療法後腫瘍性病変は消失したが、第11胸椎の溶骨性変化は改善せずCTガイド下経皮的椎体形成術を施行した。治療後自力歩行可能となり骨硬化像を認めた。【症例2】56歳、男性。右下肢のしびれと疼痛、腰背部痛を主訴に受診した。画像診断で右腎腫瘍(15×9cm)、多発性肺転移、第5腰椎への骨転移(T2N0M1)を認めた。第5腰椎に対してCTガイド下経皮的椎体形成術を施行した。治療後疼痛の改善を認めた。

## PP-5

東京都江渡瀬 博

【目的】東ついで、(保健福祉)器科医療関係者を調査し、地域に密着した。【結】らつきにおいて、状況が密着療機関の間人口比であった。線に沿ってな傾向が考慮されて

## PP-5

福井大学医学部 青木 芳隆 金田 大生 三輪 吉司

【目的】夜間痛危険因子として、夜間痛を有する患者の調査を行い、メタボリック症候群の診断基準を用いて、メタボリック症候群の診断基準(150mmHg以上の血圧、150mmHg以上の空腹血糖、1.25mmol/L以上の尿酸)を有する患者の調査を行い、夜間痛の危険因子として代